

8050問題への対応 ～ ひきこもり状態の背景に発達障がい特性があると予想されるケースの流れ

発達障がいにかかわる特性を確認してみる

ひきこもり状態にある方や家庭状況から支援につながりにくい状況を確認してみる

心身の健康状態の確認

ひきこもりの状況と心配されることの代表的なケース例

《社会性コミュニケーション》
 ○具体的な表現の方がわかりやすい
 ○自分が知っていることは全部伝えたい
 ○場にそぐわない言動をしてしまうことがある

《こだわりや狭い興味関心》
 ○狭く深く知ることが得意
 ○ちょっと違うはだいぶ違う
 ○同じ物、同じ動きをするものは安心する

《感覚の違い》
 ○触覚・聴覚・嗅覚・視覚などが極度に過敏もしくは鈍い
 ○不器用さが目立つこともある
 ○自分で工夫することや近くにいる方の配慮も大切

《多動や衝動的な行動や思考》
 ○思いついたら即行動
 ○何かをしている方が落ち着く
 ○しゃべりだしたら止まらない

《注意や集中》
 ○忘れ物、失くし物が多い
 ○ケアレスミスをよくする
 ○何かに没頭し過ぎてしまうことがある

《読み書き算数》
 ○文字が読めない、読めても内容がわからない
 ○文字が書けない、文法がわからない
 ○数の大小がわからない、計算が苦手

【その他】
 ○家族や世帯の状況
 ○生育歴や職歴、通院歴
 ○収支の状況
 ○生活リズムや好みの活動

*家族が支援に否定的であったり、本人と対等な関係を構築できていない場合に本人よりも家族支援を優先することもあります。
 ・家族への面談でのエンパワメント
 ・CRAFTの実施

他者との関わりを好まず、家族との関係が維持できているタイプ
 ・他者や世の中への動きに関心を示す様子をあまり見せず、自分の好きな世界を持っていることもある
 ・現状をなんとかしたいという気持ちは少なく、自分の1日の流れができあがっていることが多い
 ・質問に対して明確な答えを出すことが少なく「わからない」などの言葉を言って、その場をやり過ごすことがある。場合によっては知的障がいのチェックも必要

●家族の状況の確認
 ・本人への評価が低い場合があり、家族が先回りをして本人の生活がうまくいくように準備を整えていることがある
 ・家族の中にはこの状況を変えたいと思う一方で、本人に助けられている部分もあり、一歩を踏み出すのに時間がかかることもある

●ケース担当者の支援のスタンスとして
 ・本人の好きな世界の話などから関係づくりをしたい。また家族のニーズについても聞き入れていく中で、本人に必要な支援を整理する。
 ・一見、ニーズがなく見える場合もあるので、具体的な提案や体験を通して選択肢を作っていくことが必要

他者との関わりを好まず、家族との関係が維持が難しいタイプ
 ・学校や職場では適応状態が良く見られていることがあり、本人も良い適応を「演じる」ことをしている。そのため本人は人づきあいの疲労感が蓄積しやすい
 ・対人面や新規場面で不安な様子が強く、他者の評価を気にすることがある
 ・一方で家族という時には、不満を漏らしたり、時として暴力を振るうこともある

●家族の状況の確認
 ・本人のことを心配する一方で、本人の行動をコントロールしようとするところがあり、反発を受けることがある
 ・熱心でいるいるな取り組みをするが一貫性がないことがあり、状況が悪化する。親の子離れが難しいことがある（「私の育て方が悪かった」）

●ケース担当者の支援のスタンスとして
 ・家庭以外の安心と安全を保障した居場所からのスタートを検討する
 ・家族と支援の方向性などを確認して、関係機関とも緊密な連携が必要
 ・暴力がある場合には対応（緊急介入含めて）を明確にしておく

他者との関わりをもてるが、現状を維持するタイプ
 ・自分の困りごとや障がいについての情報収集をしていることが多く、お話をすると前向きで物わかりのよさそうな印象を受ける場合がある
 ・実際に生活に変化（通院や事業所利用など）が起きそうになると、いろいろな理由を言って動くことが難しい。そして動かなかったことは他責的になることが多く次の支援者を自ら探して移っていき、以前の支援者の不満を言うことがある
 ・悪い状況が続くと利用開始当初からクレーム的な言動をとって自分の精神的なバランスをとる方もいる

●家族の状況の確認
 ・本人との関わりをほとんどもたなくなっていることも多いが、本人の言うことに従いながら（時には暴力を受けて）生活していることもある

●ケース担当者の支援のスタンスとして
 ・支援者の役割分担と本人参加によるケース会議をすることで、本人が決める（同意する）手続きを進めていく
 ・すぐに現実を突きつけるよりは、本人のペースに合わせた支援展開をすることで距離をとった関わりを続ける
 ・なんらかのライフイベントが状況を動かす機会になることがある

《心身の健康面》

○生活習慣病などの疾病
 ○怪我や虫歯など
 ○家族への暴力や恫喝の有無
 ○自傷の有無
 ○奇声や徘徊、精神疾患が考えられるもの
 ○強迫的な行動
 ○対人不安
 ○入院治療の必要性の確認

以上のようなことで

気になる場合は、まずは**医療機関**への受診が必要である

心身の健康状態に心配があるケース
 ○ひきこもり生活の中で心身の健康の維持ができず治療が必要になるタイプ
 →本人が病識のないことが多いので、家族との連携が必須
 →暴力や迷惑行為の際に警察の通報から入院へつなげることもある
 →治療は障害（状況）の解決にはならないので、通院や治療後の支援についての検討が重要である
 →医療受診（家族の相談できる医療機関については各区の精神保健福祉相談員や精神保健福祉センターに相談して情報収集する

現状膠着ケース
 ○在宅で大きなトラブルもなく生活しているが、なんらかのライフイベントで生活が崩れる恐れのあるタイプ
 ・本人なりの生活リズムがあり変更に拒否的である
 ・家事などをしており家族のために役立っていることがある
 ・自ら自立するほどの収入はなく、高齢者に金銭的に依存
 →現状で困っていることがないことが多い
 →自ら支援につながりにくくセーフティネットの構築が必須
 →家族とも今後の話をしていく必要がある

地域生活の不安ケース
 ○生きるための寝る、食べるなどの行動はできているが、清掃やゴミ処理、除雪、水光熱の維持などが問題となるタイプ
 ・ゴミや除雪などで地域の人が気づくことが多い
 ・地域からの注意があっても改善されることはない
 ・健康上の問題についても配慮が必要
 →支援への不安があるため関係構築に時間を費やすことがある
 →本人のすることと支援者側のできることを明確にする
 →一度改善しても、再度起こることが多いので継続的な対応が必要

金銭管理の不安ケース
 ○収入が不安定で生活が困窮している、または浪費や管理の難しさから生活を維持できない状況が予想されるタイプ
 ・就労への意欲、またはスキルがなく就業することが難しい
 ・就職していても特定の興味・関心への浪費で収支が合わない
 ・収入から計画的なお金の支出を検討することが難しい
 ・お金について他者の介入を拒否することもある
 →生活に必要なお金を準備する必要がある（生保活用等）
 →直面化した際に就労支援機関へつながる機会を伺う。具体的な提案をしていくことで動きやすいこともある
 →後見人制度などで支出の制限ができないかも検討

***他タイプ：支援者ショッピングケース（社会的な孤立）**
 ○さまざまな支援機関に家族（本人の場合もある）が相談に行くが具体的な動きにはつながりにくいタイプ
 ・いろいろな関係機関へ向いて相談にも積極的である
 ・実際の動きの話になると消極的になる
 ・時として他罰的な対応をとることがある
 →各事業所が支援会議を通して、それぞれの役割を明確にしておく必要がある
 →家族、本人のアクション（自己決定）を尊重して支援を開始していく
 →不安が強いことや情報整理に時間がかかることがあり、動き出しに時間を要することがある

***1人の支援者や1つの事業所だけで判断しないで、他の機関にも相談してみましょう**

(例) 札幌市ひきこもり地域支援センター／札幌市委託障害者相談支援事業所（一部、地域支援員の配置があるところもあります）
 札幌市地域包括支援センター／札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる

各事業所の役割や連絡先は、2019年に作成しました【発達障がいの特性をもつ中高年のひきこもりの相談できる支援機関ガイド】を参考にしてください

現状膠着ケース

(他者との関わりを好まず、家族との関係維持ができていないタイプの支援)

8050が互いに生活を支え合っているが、今後のライフイベント次第で生活の破綻の可能性がある

現状膠着ケースの例

高校卒業後に就職するが、仕事を覚えることが難しく数ヶ月で退社となった。その後親がアルバイトなどを勧めるが自ら動き出すことはなかった。普段は家でテレビを見たり、自由に過ごしている。近くのコンビニなどにも行くことができ、ときどき家事を手伝うこともあり、その際に親からお小遣いをもらって好きなものを買っている。他人とコミュニケーションがうまくとれないことを気にしていた父母は、40代になった本人を偶然にテレビで見た発達障がいではないかと思い、発達障害者支援センターへ本人と来所した。本人は職員からの質問に答えることはできず、代わりに父母が答えており、本人には仕事をするのは無理だから、何か支援をしてほしいとの相談であった。

支援方略の例

本人の答えは明確ではなかったが、次回の面談の日程を伝えて本人に来所するように伝えた。本人が来所したときには父母は待合室にいてもらい、本人のみの面談とした。本人には具体的でかつ、YESかNOで答えられる質問であれば意思を示すことができた。好きなことややってみみたいことなどを聞き、その結果、地域活動支援センターの利用を勧めた。その際にはホームページなどを一緒に見て情報を伝え、見学のスケジュールを作って同行した。当初は週1回の利用だったが、利用時間がだんだん増えていき、本人の働きたいとの意向から就労継続支援事業所の利用となった。すでに3年経っているが、ほぼ皆勤で利用しており、父母も驚いている。

【支援やアセスメントのポイント！】

- ・本人や保護者のニーズを言える状況や関係作り。このままでよいと思っていないかもしれない。特に家族との話し合いが重要
- ・ニーズがでない間は、セーフティネットをつくって孤立を防ぐ
- ・提案型の関わりが効果的だが、具体的な情報を提供して安心して選べる配慮をする

【親のタイプへの注意事項】

- ・父母が干渉的であることが多く、子どものために先回りした関わりをすることで子どもの経験や意思決定の機会が少ないことがある。父母は自分たちがやらねばと責任を感じていることが多いので、ご本人の意見も重要視していく

地域生活の不安ケース

(他者との関わりを好まず、家族との関係維持ができていないタイプ)

(他者との関わりを好まず、家族との関係維持が難しいタイプ)

8050の生活はなんとかできているが、ゴミや除雪などの地域の方が不安に感じている

地域生活の不安ケースの例

高校中退後にどこにも所属せずにそのままひきこもり状態となる。母子家庭であり、母も仕事が続かず生活保護を受給している。本人は日中は自室で寝たり、パソコンをしたりして過ごしているが、夜になると居間に出てきてテレビを見るなどしている。食事はコンビニで買ってこることが多く、家の中は容器やペットボトルで、床が見えない状態であった。母が高齢になり民生委員が訪問に行ったところ、こうした状態を発見して、地域包括支援センターに連絡した。母親は要介護の認定となり入所系のサービス利用となるが、本人のことが心配でサービス利用に合意がなかなかできないでいた。その間にも家の中はどんどんゴミが溜まっていく状況であった。

支援方略の例

何度か地域包括支援センターの職員が訪問して、母親に「まずは自分を大切に」ということを繰り返し伝えていったことで、母親は入所系のサービス利用に同意できた。職員が本人にも事情を説明するが、ほとんどやりとりはできない状況であった。地域包括支援センターの職員が本人に、今後の家での生活について具体的な提案（清掃ボランティアの利用や配食サービスについての使い方）を書面にして伝えたところ、本人は首を縦に振り契約へと進むことができた。現在はボランティアが週1回程度の訪問をして部屋の片づけなどをしながら生活の状況をチェックしている。何か問題が起きれば、一旦は地域包括支援センターへ連絡がくるようになっている。

【支援やアセスメントのポイント！】

- ・関係作りのために、はじめは状況を動かすことを伝えるより、相談に乗ることができるとスタンスで話を聞いたり、簡単な質問を答えてもらうような段階がある
- ・こちらのプランについては、シンプルな図などで視覚的に示すことによってわかりやすくなることが多い。本人のすること（できること）と支援のできることを見せる

【親のタイプへの注意事項】

- ・父母による干渉または支援の拒否や放任のため、生活に必要なスキルを学んでいないこともある。家事の仕方などを知っているのか確認したり、両親に本人の問題と自分の問題を分けて考えることを伝える。

金銭管理の不安ケース

(他者との関わりを好まず、家族との関係維持ができていないタイプ)
(他者との関わりを好まず、家族との関係維持が難しいタイプ)
8050の生活はなんとかできているが、今後の金銭管理などに不安がある

金銭管理の不安ケースの例

大学受験がうまくいかずそのままひきこもり状態となる。パソコンやゲームを一晩中やっており、昼夜は逆転している。時々、外出していることがあるが、どこへ行っているのかはわからない。お金については、親が月々の小遣いとして3万円と、欲しいものを言われた時に都度、必要な額を渡している。その後、父が高齢になり自営の仕事を辞めることを考え始めた。父母は貯蓄があるため自身の生活自体は困らない状況ではあるが、本人の浪費に困り、発達障がいのADHDではないか考え障害者相談支援事業所へ相談した。相談員から「本人にお金をあげない」ことを言われるが、本人の今の状況は、自分たちの責任もあると思い、お金を払わない気持ちにはなれないと言う。

支援方略の例

障害者相談支援事業所の職員はその後にも父母の相談を続けて、「お金を渡すことが、実は本人の就労意欲をなくしている恐れもある」ことを伝えた。

父親は75歳の年に自分の事務所を辞めることを本人に予告して、その年から小遣いなどのお金を渡せないことを、書面にして本人に読んで見せた。またお金に困ったら就労生活支援センターへ相談できることも伝えた。その後、本人からはお金の要求はなく、就労生活支援センターにも行ったようだった。そこでは「親が仕事を辞めたから、お金を稼がないといけない」と伝えていたとのことだった。発達障がいの診断についても支援者から勧められて受診し、就労移行支援事業所の利用をしている

【支援やアセスメントのポイント！】

- ・お金の渡すことは、本人の就労意欲などを妨げる場合もある
- ・金銭の要求を断った時のことや本人と両親の関係性からリスクマネジメントをする
- ・ルールについては「できるもの」を「事前に予告」して実施することが望ましい

【親のタイプへの注意事項】

- ・父母が干渉的であったり障がいの否認などがあると障がいの診断につながるまでに、時間を要するケースも少なくない。「診断」という切り口よりも、「就労」「自立」という一般的な切り口や本人のニーズから話を始めて、そのために「診断」という方法も選択肢にあると伝え、必要があれば受診を勧めていく

心身の健康状態に心配があるケース

(他者との関わりを好まず、家族との関係が維持が難しいタイプ)
8050の生活は50に二次的な障がいなどがあり、生活に支障ができていない

心身の健康状態に心配があるケースの例

大学卒業後、就職をしていたが40代になり職場の配置換えを機会に、人間関係のトラブルが続き離職する。その後、親の勧めで知り合いの会社に就職するが、そこでも人間関係のトラブルで離職し、ひきこもり状態となる。ひきこもりの原因は仕事を紹介した母親だと、強く非難し始めた。母も自分が悪かった部分もあると思い、本人に従うようになった。父親が亡くなってから、本人の行動はエスカレートして、思い通りにしないと母を蹴ったり、脅迫するようになってきた。母の物忘れなども目立ってきて福祉サービスを検討するが、「だれも家に入れるな」と言って、サービスを受けることができないでいる。どうしたらよいのか地域包括支援センターへ相談することになった。

支援方略の例

地域包括支援センターの職員の聞き取りで、暴力以外に、シャワーに毎日3時間以上も入ることがわかった。役所の相談員とも話したところ、精神疾患も疑われるため家族相談を受けつけている病院へ相談を勧められた。医師からは入院治療が必要な可能性が高いと言われたが、本人を受診させることができず、また母自身が自宅を離れ(入所系の利用)提案も受け入れられなかった。今後、再び暴力を振るわれた際には、110番通報すること、通報がきっかけで受診・入院につながる場合もあることが説明された。まもなく本人からの暴力のため、警察通報して入院となった。強迫症の治療と発達障がいの診断がつき、今後は福祉サービスで自立生活をしたいと希望があり調整中である。

【支援やアセスメントのポイント！】

- ・入院すれば状況が全てよい方向に動くことは考えにくいので、本人が別の場所で自立した生活を送る応援をしていくことが望ましい。家族との同居を継続する場合には、訪問看護など外部から支援を入れる検討し、退院前に「同居の確認事項」を家族を中心に本人と支援者とともに決めることもあるかもしれない。

【親のタイプへの注意事項】

- ・父母がもともと干渉的であることも見られるが、ある時点で立場が逆転してしまうと、父母が子どもの言うことを聞かなければならない状況になる場合がある。この時にはご家族の安全確保が大事な視点の1つになる